

日本の国は、過去に侵略戦争したことを認めた立場で、しっかりと世界情勢を見て、政治家が一貫となつて日本国憲法第一条と第九条を護り通すしか生命界地球は救われない刻で御座います。

自由主義国に乗せられた明治政府

徳川幕府に開国を迫った自由主義国家・アメリカ・イギリス等の国々は、日本国を殖民地にするよりも、独立国として朝鮮半島・大陸に進ませて、極東ロシアと対立させて共産主義の進出を食い止めるとともに、フリーメーソンに武器を売らせて儲けさせ、自由資本主義国の国益にする一石二鳥の妙案として、明治政府に対して言葉巧みに迫ったので御座いました。

大日本帝国憲法発布

明治二十二年（一八八九）「大日本帝国憲法」が発布されました。

しかし、「この憲法は日本国を亡ぼす憲法であるので、直ちに水に流す。」と神が仰せになり「熊野大斎原」の世襲最後の伊邪那岐夫妻の御霊魂処を、大洪水でながしてしまいました。

そして翌年の明治二十三年に「教育勅語」の原文を「長沢雄楯」に書かせ、明

治天皇が「教育勅語」をアメにして、大日本帝国憲法を発表されたのですが、神の大御意志に従わず、武器商人（フリーメーソンの口車に乗せられて、大量の武器を購入して、工業先進国の武器輸出のための代理戦争とも言える「日清・日露戦争」をし、朝鮮併合・満州戦争と煽り立てたので御座いました。

庶民は戦争のために命を投げ出し、隣国には多大な被害を与えてゆくばかりでありました。しかしこうした体制を非難すれば、網走刑務所に送られて拷問と極限の寒さで命を落としてゆきました。

「明治政府」とは、このような幕府から奪った権力を温存し、それを更に大きくしてゆく長州を中心とした権力集団であり、ついには大陸へと利権を求めて戦争する体制を創り上げていったのでした。

神祇の裁定

日清・日露の戦争は、日本国民が民族の誇りと信じ、自分の事や家族の事など口にもせず、お国のためと朝鮮半島を拠所として戦い、満州事変へと続きました。

そして中国との戦争を終わらせる事が出来ず、そのまま東南アジアの国を巻き込む極絶太平洋戦争に突入して行きました。これは、他国の領地と人民を踏み躪り、犠牲を虐げた戦争でありました。これが侵略戦争であったことを確りと肝に命じなければならぬ日、やがて来る事を神はご存じでありました。

最早、これ以上の戦いは何方にとつても勝ち負けではなく、恐怖の殺戮の世界に生命を封じ込めてしまい、犬死にとなる犠牲者の数を増すだけでなく、狂気の沙汰の兵器開発を促進させ、核戦争となつて生命遺伝子が破壊されて、この生命界を滅亡に導いてしまう事を神は憂慮しておられました。

そこで、昭和二十年（一九四五年）四月十二日に、生命をお生産出しになられた「天照皇大御神」さまの「神祇の裁定」が、人間の「生命継承権憲邪」人祖「初代」伊邪那岐人神さまを、通して「昭和天皇」と中国の「蒋介石総統閣下」とアメリカの「ルーズベルト大統領」に天降りされたので御座いました。「このまま戦争をすれば、後がどのようなになるのか判るはずです。後始末の出来る内に、停戦するが善いでありましょう。」と仰せになりました。

※昭和天皇の魂

人祖が「天の意和戸」をお出ましになる時、「欲から発する知恵」は禁じられ、生命界が永遠に弥栄であるよう「知瑠恵」が授けられ、「絶対に争い戦いは致さぬ」を誓う「御難賛助の御誓約」を産霊ばれて、丹ノ本の国・與謝津「天記津州」に御降臨・御降誕あそばされました。この神との約束の儀式が「大嘗神祇祭」で御座いました。

この始めの国が、明治・大正・昭和と権力者の利権拡大のために、天皇の名の下に戦争に駆り出され、玉砕していった御靈魂にどうお詫びするか。そして次に来るであろう始めの国の宿命とも言ふべき、核の戦場となる天記津州をどう護っているか。「昭和天皇」は身体極まられた夢の中に、戦死された御靈魂たちが出て来られて「このような戦争で、親子・夫婦・兄弟が死に別れて逝くのは我らだけでよい。もう二度と戦争をしない施津が欲しい。」と、訴え出られたので御座いました。

天皇は吾に立ち返られ「天照皇大御神」さまの大御意思であります「神祇の

裁定」にお従いになり、これをお伝えになられた皇祖皇宗の御靈魂に涙され、直ちに杉山元帥をお呼び出しになり、日本国軍が押し進めていた原子爆弾の製造を中止させになり、この度の侵略戦争の犠牲となった国々に謹んで詫び入りながら、多くの愛国の若き殉難者の御靈魂を絶対に犬死にさせない為に、初めの国の責任において、戦争を国権の発動と認めず、二度と戦争をしない事をお誓いになりました。そして、停戦の詔勅とともに、連合国に無条件降伏をされ、世界の恒久平和のための正義の礎になるよう、神に生命をお預けになり、日本の国の再興を懇願あそばされたので御在ました。

※蒋介石総統閣下の魂

「蒋介石閣下」は孫文を師と仰ぐ社会主義思想の持ち主で御座いました。日本が中国を侵略して行った時、米英の資本主義国は、中国に加勢して来ました。この時「蒋介石閣下」は日本と中国を一つにした社会主義の思想を呼びかけ、世界に伝えようとされたのでした。なぜならば、このまま資本主義を推し進めていくことは、将来、世界が富める国と飢える国と分断されてゆき、戦争発生 of 火種となってゆくからで御座いました。しかし中国は日本軍により多大な被害を受

け、日本を許すことなど当然できるものではない状況下にありましたが、中国国内を資本・共産の両主義に依って内乱にさせない為、また日本の将来の為、世界の平和のためにも日本を許す事が出来るのは、其方しかないという神の御意志にお従いになりました。核ミサイル時代を迎えるであろうこれからの世界で、平和を求めるには、原子爆弾を投下したアメリカには任せる事は出来ない。

そこで大東亜共栄圏を唱えて戦い敗れた新世日本と、中国とロシアの国々とで、大和の国の和の精神をもって世界平和を完成させて行くこと。これが「神祇の神」の大御意志で御座いました。

「蒋介石総統閣下」はこの神の大御意志にお気づきになり、許せざるを許す「以德報怨」の靈魂をもって日本をお許し下さいました。

昭和二十年八月十日、まもなく日本が投降するのを見越され、日本に対する戦争処理について、蒋介石が自ら筆を執られて原稿を作成し、八月十四日に録音されて、翌日十五日の午前十時（日本時間・同十一時）に重慶より放送されました。

- 一、中国に在任していた日本の軍人と居留民二百余万人を無事復員させる。
- 一、捕虜もつぐらずポツダム宣言で決めた十九兆円の賠償金を放棄する。
- 一、日本列島の四分割占領については、日本の将来のためにはならない。

一、天皇処刑のことは、日本人自身が決める事であり、他国が口出しする事すに侵略である。

この様に告示されたので御座いました。そして、これからの世界は資本主義ではなく、社会主義を打ち立てていくことを願ってお出でになりました。このようにして、「蒋介石」は、中国の中にある資本主義の考え方を持つ人たちを引き連れて、台湾に隠遁いんとんされて世界平和への倫理みちを築いていかれたので御座いました。

※ルーズベルト大統領の魂

神はアメリカに対しては、原子爆弾の製造を中止して「昭和天皇」と話し合うよう仰せになりました。しかし、「ルーズベルト大統領」は、アメリカの軍力を世界に示す絶好の機会であるという意志いしを露わあらにされた為、神は、その日に即決そっけつで命を召し上げたのでございました。(一九四五年四月十二日ルーズベルト死亡)その後の大統領が日本に原子爆弾を投下しました。

日本は明治・大正・昭和と神に背いて侵略戦争をして、初めての国の責任(宿命)として、人類史上初めての原子爆弾を受けるといふ憂き目に遭ったので御座いました。特に広島では一瞬にして二十万人を越える市民が虐殺された悲劇に、日本政府は米国に抗議することすら出来ず、それどころか日本国軍は、本土決戦

一億総玉砕いちおくそうぎよくさいを唱となえて突き進んで行くばかりでありました。

例えどのような理由があつたにせよ、愛を称たえる世界最大のキリストの国が、世界で一番最初に核兵器を使用した事は、生命をお創造おつくりくだ下さいました神に対して、詫びても、詫びても詫びきれない事であり、本来ならば国を挙あげて生命の神にお詫びをしなければなりません。

戦争責任についての神の御詞おことば

明治・大正・昭和における侵略戦争の責任は、明治以来の日本国政府が突き進めて来た富国強兵・経済優先政策が、生産うみだ出した幻まぼろしなのであります。従つて昭和天皇の責任でもなければ、東条英機の責任でもないのです。明治・大正・昭和と日本国政府が推し進めた欲望の大国主義を支援した国民の靈魂に総ての責任が有るのです。

日本国憲法第一条と第九条

三位一体さんみいつたいの生命を誕生させるために、神が選えらび定められた生命の免疫所めんえきじころ・與謝津よさかい「天記津州」あきつしまは、京都府與謝郡峰山町から元伊勢・天橋立・若狭に通じる地域で

御座います。ここに「天の意和戸」において「御難賛助の御誓約（この世で生きてゆくには、いろいろ難儀がありましようが、絶対に争い戦うことなく、お互いに助け合って生きて行きます）」をされ、人類として最初に御降臨・御降誕あそばされた人間の「生命継承権憲邪」さまの血脈・系譜を継承する大丹生天皇家は、世界の中でこの日本だけに、今まで継承されて来ているので御座います。

その天皇家が先の戦争において、この国体の名誉に傷を付け「多くの若者を犬死にさせてしまい。」死しても詫びきれない想いの中、この上この「生命の故郷、天記津州を戦場にする」ことは許されない為、神のお認め下さる戦争終結の仕方にお従いならうと、この地球に生きる総ての生氣物を核兵器から護り、二度と戦争をしない絶対不戦を神にお誓いになりました。

この天皇のご決断を観届けになられた神は、大丹生家天皇の靈魂を継承すべく、天皇の御位を「日本国憲法第一条」におくみ上げになりました。そして、神が仰せになりましたことは、『人間は軍力・武力・権力・金力というものに固執してはいますが、ここまで来れば解かるであります。日本が人祖の国であるが故に、

争い戦いを致さぬ事を神と約束したその責任において、戦争を国権の発動と認めない「憲法第九条」を与えたのです。』というお詞で御座いました。

九条は九氣九神の総要「天照皇大御神」の大御意志である為、九番目になっております。「弥勒再下生の神聖画」の中に九神の理を九条の旗で現わされました。こうして神は日本をお救い下さるための二津の懇願を同時に叶えることの出来る御神聖「日本国憲法第九条」を天降しになり、停戦と同時に日本国を世界平和の聖国とされ賜いたので御座いました。日本がああ焼け野原から目覚めて復興を遂げられたのも、昭和天皇が大丹生天皇として、神がお認めになる本来の天皇のお姿に立ち返られたからで御座いました。

「万世までの太平を開かんと望す。」と神の大御意志を人類に約束されて、人類後期の世界平和の道標が出来たので御座いました。このように「天皇は、神の大御意志を伝達実行なさる皇尊で御座います。故に日本国民がこの御神示を理解し従うことが出来た時、「日本国を立て直すことが出来ると同時に、全人類・地

球が救われる。」時であると仰せで御座います。これこそが弥勒みろくの世で御座いますしよ。

こうそこうそう 皇祖皇宗の御靈魂みたまを戴く初めの国が、もしも神との約束を無にして戦争してゆくなれば、今度は原子爆弾では済まされない「核の戦場」となる事を覚悟しなければなりません。

故に九条は核を持つようになった人類に降ろされた最後の神の御慈悲おじひであり、次に来るであろう核戦争を封印し、生命界が弥栄であるよう願われた「世界平和憲法」で御座います。

森友学園問題

学園の方針として国歌「君が代」斉唱と教育勅語を幼児に暗唱させ、園児・家族・国民の魂を洗脳し、昭恵夫人を名誉校長とし、安倍総理がんばれ！など、新しく小中学校を開設する計画の森友学園のニュースは、神は今、数で政治を司っている権力支配の姿を、私たちに見せてくださっています。

それは、明治政府が大日本帝国憲法発布する時、「この憲法は日本国を亡ぼす憲

法であるので、直ちに水に流す。」と「熊野大斎原くまのおおゆのはら」の世襲最後伊邪那岐夫妻の

みたまどころ御靈魂みたまを、大洪水でながしてしまったことを知瑠恵で反省もなく教育勅語をア

メにして知恵で発布した当時の明治政府の権力支配と同じ歴史を辿っています。

三月七日は岐阜県土岐市下石町にある核融合炉で、重水素を用いた実験が開始された。実験では大量の中性子線と放射性トリチウムが発生するため、安全性に疑問視されている施設であると言う情報が入りました。

この事は、一般にニュースにしないマスコミも権力支配されているのだろうか？

安倍首相は、三月五日第84回自民党大会で、今年5月3日に日本国憲法の施行から70年を迎えることを踏まえ、次の70年に向けて新たな国づくりに取り掛からなければならぬ。自民党は憲法改正の発議に向け具体的な議論をリードしていく。それこそが、戦後一貫として日本の背骨を担ってきた自民党の歴史的使命ではないかと訴え、憲法改正の実現の強い意欲を表明した。

三月六日早朝、北朝鮮が日本向けミサイル発射した事は、神は日本国民に氣付きの活動氣はたらきを見せていることと悟って下さることを希望いたします。

拝

平成二十九年三月九日

三代目

東核芒種大伝道師

加

古

藤

市